

上田耕造著

## 『ブルボン公とフランス国王』

——中世後期フランスにおける諸侯と王権——』

晃洋書房 二〇一四・三刊

A5 二四〇頁 三六〇〇円

本書は、著者の学位論文（二〇一〇年九月、関西大学）を加筆・修正のうえ出版したもので、中世後期フランス王国の政治史に関して、歴代ブルボン公とその諸侯領の「国家的」発展の視点から、諸侯と王権の関係を考察する。序章、本論（二部七章）、終章から構成される。

序章では、時代背景と主要先行研究の概観を通じて、王権と王国の成長という直線的な歴史像を、地方とりわけ諸侯国家の視点から見直すという目的のもと、冒頭に述べた考察課題が設定される。

第I部は、一四世紀後半のブルボン公ルイ二世期を中心に、「ブルボン国家」の成立基盤を論じた三章からなる。第一章では、シャルル六世政権下で王国人事に影響を及ぼした公ルイを媒介として、その臣下達が王国中央ないし地方の諸官職に進出した背景を明らかにし、こうした人の流れを通じブルボン国家が王国と繋がっていったと指摘する。第二章では、オルレアン派とブルゴーニュ派の対立を軸に描かれがちな同時期のパリに関して、両派の和解定立に奔走したルイの動向を年代記を用いて論じ、彼は国政運

営上のバランスであったとする。第三章では、ブルボン国家周辺に視点を移し、ボージョレ領の相続問題をめぐるルイとボージョー卿の行動に関して、遺言書などの証書史料を用いながら、地元貴族層が置かれた危機的状况など相続にいたる背景を探り、諸侯国家拡大を促した地域的狀況を明らかにする。

第II部は、シャルル七世期以降の王権再建のなか、ルイ二世後の歴代公がこれにどう対応したかを扱う四章からなる。第四章では、アラス条約やパリ奪還を根拠に「王権の確立」期と評価される一四三〇年代前後に関して、ブルボン公もそのひとりであった国王顧問官の役割に注目する。王国の財政および軍制の再建を目指す諸勅令が發布されるにいたった人物史的背景が、年代記史料を通じて明らかにされる。第五章では、ブルボン公シャルル一世が中心となって起こされた一四四〇年プラグリーの乱の意義について、国王宮廷での公周辺の動向を改めて検討する。反乱後、王がシャルルに与えた赦免という措置が、のちにブルボン公家とその派閥が王の勅令隊において昇進していく契機となったと論ずる。第六章では、ルイ一世王に対する諸侯同盟の戦いである一四六四年以降の公益同盟戦争に関して、戦後の王とブルボン公ジャン二世の合意にいたる過程を検証する。同戦争を通じて、ジャンが王から勅令隊長職と王国中・南部における国王総代官のポストを獲得したことに、著者は王と諸侯による相補関係の形成を読み取る。第七章では、こうして構築された相補関係のその後の展開に関して、ブルボン公役人が訴えられ、勝訴した一四八〇年のパリ高等法院での訴訟に注目し、その意義を裁判記録などから再検

討する。衰退していく諸侯という従来の評価に対して、王ルイはブルボン公役人側の勝訴を受けて、諸侯領への影響力行使の限界を認識したと結論付ける。

終章では、ブルボン国家をはじめとする諸侯国家が王国成長のカギを握っていたという理解とともに、所領や婚姻を通じて時に王国外とも繋がっていたその他の諸侯国家にも焦点を当てること、今後の課題として示される。

我が国の中世後期フランス史研究は、ブルゴーニュ公国史に偏りがちである。そのなかで本書の意義は、王権との関係が比較的良好であったとされるブルボン公に焦点を当て、一四世紀中葉から一六世紀初頭にかけて、その王権との関係変容を明らかにしたことにある。年代記、勅令、遺言書、高等法院裁判記録など、本書が用いた多様な史料について、全体像の明示や引用が望まれる箇所もあったが、本書を機に「諸侯領がなすフランス」(La France des principautés)の視点から、王国の多元的構造の解明が進むことを願う。

(佐藤 猛)